

宮沢賢治の恋

平成 29 年 12 月 31 日

敏翁

前回本ホームページに掲載した『宮沢賢治と法華経』の「終わりに」に記した、
本年 5 月 6 日 NHK 教育 TV、こころの時代で放送された

①『宮沢賢治 はるかなる愛』で知った

② 沢口たまみ著『宮沢賢治 愛のうた』盛岡出版コミュニティ 2010 年発行
を、横浜市立図書館から借用し①及び②の内容を主体として要約したのが、
本題検討の始まりです。(以下のⅠ.とⅡ.)

そこでは、①、②とも賢治の詩作を多数引用しているので、

校本 宮沢賢治全集 筑摩書房 の第 1～6 巻(詩作のすべてが掲載)
も再借用し、随時参考にしております。

その後、本題に関する新たな書籍(澤村修治著『宮沢賢治と幻の恋人 澤田キヌを追って』)や、
本題を扱った映画『宮沢賢治の食卓』(WOWOW で 6～7 月に 5 回に亘って放映)に関する
追記的な感想とも言えるものを書き加えました。(以下のⅢ.)

Ⅰ. 4つの恋

以下②からの抽出です。

文語詩「機会」によれば、賢治は生涯に四つの恋をしたといます。

機会

恋のはじめのおとなひは／かの青春に來りけり

おなじき第二神來は／蒼き上着にありにけり

その第三は諸人の／榮譽のなかに來りけり

いまおゝその四愛憐は／何たるぼろの中に来しぞも

(校本 宮沢賢治全集 筑摩書房 第五巻 237 頁 これを

校本五 p.237 と略記 以下同様)

「おとなひ」は「おとずれ、訪問」の意味です。

もっとも四つの恋のうち、はじめの二つは学生時代のことで、おそらくは片思いや憧れに
過ぎません。

そしておしまいの一つは羅須地人協会を主催していたころのことで、見合いをしてお互いに
好感を持ったものの、賢治が病に倒れてしまったため、進展はしませんでした。

ゆえに、「ぼろの中」です。(②)

①のすべてと②の大半(全 309 頁中 193 頁)は、第 3 の恋に関するものです。

その第 3 に入る前に、第 1、第 2、第 4 と賢治が悩まされた女性について簡単に
紹介することにします。

1.1 第一の恋

②の最後に賢治の女性関係にウェイトを置いた略年譜があります。以下随時それを引用する事にします。

- ・〇歳 明治二十九（一八九六）年 八月二十七日、岩手県(現・花巻市豊沢町)に、
質・古着商を営む宮澤家の長男として生まれる。
- ・十八歳 大正三（一九一四）年三月、旧制盛岡中学校を卒業。家業を継ぐことを嫌い、思い悩む。
四月、鼻炎の手術のため岩手病院に入院、看護師に恋をする。

この看護師の名前は明らかになっていません。

②にも引用されている短歌を一首だけ掲げる事にします。

十秒の碧きひかりは／去りたれば／かなしくわれは／又窓に向く

(校本一 p.19)

「十秒の碧きひかり」とは、検温のあとに脈拍をとる一瞬の看護師が自分の手をとるときの、つかの間の喜びを表しているのでしょう。(②)

1.2 第二の恋

- ・十九歳 大正・四（一九一五）年四月、盛岡高等農林学校（現・岩手大学農学部）農学科第二部（のちの農芸化学科）に進学。寄宿舎「自啓寮」に入る。
宣教師ヘンリー・タッピングのバイブル・クラスに通う。

このヘンリーの娘ヘレンを秘かに恋したのではないかとされています。

文語詩にある第二神来の「神来」はキリスト教を示しているとされます。

1.3 第四の恋

- ・三十二歳昭和三（一九二八）年六月、土性調査のため、伊豆大島に伊藤七男、チエ兄妹を訪問する。
チエとの見合いも兼ねていた。八月に発熱し病臥、実家に戻る。

伊豆大島に住む伊藤七雄が、大島に農芸学校を設立しようと考えており、すでに羅須地人協会の活動を始めていた賢治に、助言を求めにやって来たのでした。このとき妹のチエもいっしょに来たのは伊藤家のほうに、見合いの意図があったためだということです。

この大島旅行は、三原三部と呼ばれる詩に歌われていて、その第三部には賢治の心のときめきが伝わってくるようですが、長いので省略します。

(三原は三原山から採ったもの。三原三部は校本六 pp.215-236)

ここでは晩年回想しつつ詠った文語詩「火の島」を掲げる事にします。

海鳴りのとどろく日は
船もより来ぬを
火の山の燃え熾りて
雲のながるゝ

海鳴り寄せ来る椿の林に

ひねもす百合掘り

今日もはてぬ

(校本六 p.656)

「百合」は、賢治にとって「女性の愛」を暗示するものだったようで、「百合を掘る」とは、恋をしたときにしばしば使われる表現です。

例えば、短歌では第一の恋に関連していると思われるものがあります。

友だちの／入学試験ちかからん／われはやみたれば／小さき百合掘る

(校本一 p.23)

又「百合を掘る」というタイトルの詩もあります。(校本五 p.250)

ちなみに「火の島の歌」は、ウェーバーの歌劇「オベロン」第二幕の人魚姫たちの歌からメロディーをとって、賢治が自作の詩に乗せてうたっていたものです。(②)

(楽譜が校本六 p.657 にあります)

1.4 露の恋

- ・三十一歳昭和二(一九二七)年 秋ごろ、クリスチャンの女性教師、高瀬露が訪ねてくるようになり、賢治を悩ませる。

この露との間には結婚話まであったのですが、何か露が賢治を怒らせてしまったようで、賢治にはめずらしい激しい怒りの詩が残っています。(文語詩未定稿 校本五 p.226)

最も親しき友らにさへこれを秘して

ふたゝびひとりわがあへぎ悩めるに

不純の想を包みて病を問ふと名をかりて

あるべきならぬなが夢の

(まことにあらぬ夢なれや／われに属する財はなく

わが身は病と戦ひつ／辛く業をばなしけるを)

あらゆる詐術の成らざりしより

我を呪ひて殺さんとするか

然らば記せよ

女と思ひて今日までは許しても来つれ

今や生くるも死するも

なんちが曲意非礼を忘れじ

もしなほなれに

一分反省の心あらば

ふたゝびわが名を人に言はず

ただひたすらにかの大曼荼羅のおん前にして

この野の福祉を祈りつゝ

なべてこの野にたつきせん

名なきをみなのあらんごと
こゝろすなほに生きよかし

尚、次の書籍も発行されています。

上田 哲 鈴木守共著 『宮澤賢治と高瀬露』

内容は

- | | |
|-------------------------------|------|
| I 「宮澤賢治伝」の再検証? — 〈悪女〉にされた高瀬露— | 上田 哲 |
| II 聖女の如き高瀬露 | 鈴木 守 |

本文は上記赤下線をクリックすれば読む事が出来ます。

男女間の行き違いなどは、世の中に掃いて捨てるほどある訳ですが、
賢治があまりにも有名になってしまったため後々まで大騒動になったのだと思います。

II. 第三の恋

- ・ 二十六歳大正十一（一九二二）年 十一月二十七日、よき理解者であった妹トシが二十四歳で没。

「永訣の朝」、「無声慟哭」などの詩を作る。

このころ、大島ヤス子という小学校の代用教員と交際をしていた。

2.1 第一次資料

②で沢口が大島ヤス子の存し在を知ったのは、佐藤勝治によるとしています。

その参考資料としては、

③ 佐藤勝治 『宮澤賢治・青春の秘唱 ” 冬のスケッチ” 研究(増補版)』

十字屋書店 昭和 59 年発行

を挙げています。

拙文の性格からは、ここまで追及する必要もないのですが、一部誤解もありそうなので、

③を図書館から借りて通読しました。

その概要を以下に記すことにします。

③の付録第2 「賢治をめぐる恋人たち」がそれに該当します。

-
- i. ③の著者佐藤勝治は、大正 2 年花巻市豊沢町に生まれ、賢治と同町内だったこともあり、生前の賢治の姿を目のあたりにして育っています。
 - ii. 佐藤は昭和 59 年当時、盛岡市小杉山に住んでいて、副町内会長でしたが、町内会長の夫人が大島ヤス子の親友の妹でした。
佐藤の依頼もあり、夫人宅からヤス子の写真が捜し出されていて、これが NHK の放送で使われたものと思われます。
③に掲載された画像を次に示します。



- iii. ③の付録2は、二つあり、I「Y子と呆<コウ>子(その1)」(1979・6の日付あり)では、実名は伏せてY子としています。
- II (その2)(1981・10 岩手日報掲載文加筆)で初めて(?) 実名大島ヤス子を明らかにしています。
- iv. 賢治の詳細な年表を作成した堀尾青史は、「春と修羅」の初期の恋人として、木村呆子(画像の左の女性)を考えていたようでした。他にも彼女だと思っていた者が居たようです。
- しかしそれは彼女に賢治が昭和5年頃好意を持って事と記憶が入り混じって居た事によるもので、「春と修羅」時代には彼女は未だ13才であり、候補には無理がある事を佐藤は明らかにしています。
- 佐藤は、第4の恋人として木村呆子を候補に挙げています。
- v 付録2には、賢治とヤス子の関係に関する多くの情報が書かれていますが、その一部を(その2)から抽出して見ます。

二十五歳の賢治が大正十年九月、無謀な上京(国柱会奉仕)を中止して帰宅したとき、ヤス子は普通った花城尋常高等小学校の代用教員をしていた。二十一歳であった。間もなく賢治も、農学校の教師となり隣の女学校教師藤原嘉藤治と一緒に、毎週土曜日の午後、女学校の音楽教室で同好者を集めてレコード鑑賞会を催した際、ヤス子は花城小学校の同僚の中心となって参加した。彼女は家庭でも職場でも広く慕われるやさしく、しんの強い女性となっていた。

(中略)

賢治らの音楽グループにも男女参加者間の恋愛がささやかれ、佐藤専平、熊谷里子の若い二人の教員は、町民や教育界の騒然たるば(罵)声をよそに、勇敢にも遠く函館に逃避した。彼らは愛の先駆者、殉難者であった。

(この熊谷里子がヤス子の親友であり、ヤス子は里子に賢治とのすべてを打ち明けていた。かなり熱烈な恋愛であったらしい。)

賢治とヤス子の愛については、去る十月二十日夜の県立図書館での講演以後、筆者のもとに貴重な報告がもたらされた。一つはヤス子が小さな妹を連れて宮沢家に賢治を訪ねていたという、ヤス子の近親者による証言であり、他の一つは、宮沢家から大島家に結婚の打診があったという最も重要な報告である。(これらの報告者の名はしばらく秘したい)

vi. 佐藤はヤス子の死を異国で昭和 6 年としています。

②で沢口はこれをそのまま採用しています。実際の死は NHK の放送によると昭和 2 年、これは NHK の調査能力の高さから確かだと思われま

2.2 大島ヤス子

②で沢口たまみが語っていたのは、詩集『春と修羅』は表のテーマはトシとの別れだが、裏のテーマは、見え難くは作っているが、ヤス子との恋と別れであるとの事です。

フェルトの草履美しくして

なべての指は 荒みたり

さもいたいけの をみなごの

オペラバッグを振れるあり

暁惑ふ 改札を

ならび過ぐると おのおのに

人なきホーム 陸の橋

まなこさびしく ふりかへる

(校本五 p.851)

賢治の弾んだ心が見えるようです。

若干解説すると、彼女の実家はソバ屋で、家業の手伝いから指先は荒れているのです。

しかしこの恋もトシの死を機に破局したのです。

この辺りから①に沿って話をすすめます。

①と②でヤス子の死の時期が異なっていて、多分 NHK の強力な考証能力(現在も放映が続いている Family シリーズからも解ります)を考えると①が正しいのではないかと
思われるからです。

その頃を後から振り返って詠った詩があります。

きみにならびて野に立ては / 風きらゝかに吹ききたり

柏ばやしをとゞろかし / 枯れ葉を雪にまろばしぬ

峯の火口にたゞなびき / 北面に藍の影置ける

雪のけぶりはひとひらの / 火とも雲とも見ゆるなれ

さびしや風のさなかにも / 鳥はその巢を繕はんに
ひとはつれなく瞳澄みて / 山のみ見るときみは云ふ

あゝさにあらずかの青き / かゞやきわたす天にして
まこと恋するひとびとの / とはの国をば思へるを

(本稿は「雨ニモマケズ」手帳に書かれたもの。校本五 p.390)

この第三節は、ヤス子の言葉だと思われます。

「鳥さえも風が吹けば巢を繕うのに、あなたは澄んだ瞳で山ばかり見ているのですね。」
賢治はトシの死で女性への愛よりも深い問題が重要になっていて気持ちにすれ違いが生じてしまった事を追憶しているのでしょう。

ヤス子は、年上の医者と結婚し、1924(大正 13)年に渡米しています。

その一ヶ月ほど前に『春と修羅』が自費出版されたのです。

この詩集の最後にあるのが「冬と銀河ステーション」です。

この中に土沢という町が出てきますが、これはヤス子の嫁ぎ先のある町なのです。

少し長い詩ですが、その全文を掲げます。

そらにはちりのやうに小鳥がとび／かげらふや青いギリシャ文字は
せはしく野はらの雪に燃えます / パツセン大街道のひのきからは
凍ったしづくが燦々と降り / 銀河ステーションの遠方シグナルも
けさはまつ赤に澱んでゐます / 川はどンドン氷を流しているのに
みんな生ゴムの長靴をはき / 狐や犬の毛皮を着て
陶器の露店をひやかしたり / ぶらさがったた章魚を品さだめしたりする
あのにぎやかな土沢の冬の市日です

(はんの木とまばゆい雲のアルコール／あすこにやどりぎの黄金のゴールが
さめざめとしてひかってもいい)

あゝ Josef Pasternack の指揮する／この冬の銀河軽便鉄道は
幾重のあえかな氷をくぐり / (でんしんばしらの赤い碍子と松の森)
にせものの金のメタルをぶらさげて / 茶いろの瞳をりんと張り
つめたく青らむ天椀の下 / うららかな雪の台地を急ぐもの
(窓のガラスの氷の羊歯は / だんだん白い湯気にかはる)
パツセン大街道のひのきから / しづくは燃えていちめん降り
はねあがる青い枝や / 紅玉やトパーズまたいろいろのスペクトルや
もうまるで市場のやうな盛んな取引です

(校本二 p.217)

キリスト教では「やどりりぎ」の下で出会えば幸せになると言い伝えられているそうで、
この詩は、ヤス子夫妻への祝福を込めた詩になっていると思われます。

そしてこの詩を最後に置いた事、その出版がヤス子渡米の一ヶ月前である事は、

『春と修羅』が亡くなった妹トシと同時に別れざるを得なかった恋人ヤス子への惜別のモニュメントであるとも言えるのではないかと思えるのです。

しかしヤス子も薄幸でした。米国で 1927(昭和 2)年に 27 才で亡くなっております。その知らせを賢治がどのようにして受けたのかは分かりませんが、その死の一ヶ月後に次の詩を作っています。

尚、②ではヤス子の死は昭和 6 年となっていて、この詩への言及はありません。

〔わたくしどもは〕

一九二七、六、一、

わたくしどもは
ちやうど一年いっしょに暮しました
その女はやさしく蒼白く
その眼はいっでも何かわたくしのわからない夢を見てゐるやうでした
いっしょになったその夏のある朝
わたくしは町はづれの橋で
村の娘が持って来た花があまり美しかったので
二十銭だけ買ってうちに帰りましたら
妻は空いてるた金魚の壺にさして
店へ並べて居りました
夕方帰って来ましたら
妻はわたくしの顔を見てふしぎな笑ひやうをしました
見ると食卓にはいろいろな菓物や
白い洋皿などまで並べてありますので
どうしたのかとたづねましたら
あの花が今日ひるの間にちやうど二円に売れたといふのです
……その青い夜の風や星、
すだれや魂を送る火や……
そしてその冬
妻は何の苦しみといふのでもなく
萎れるやうに崩れるやうに一日病んで没くなりました

(校本六 p.169)

賢治のヤス子への追憶の念に満ち溢れた良い詩だと思いますが、賢治の女性の捉え方がこの様なものであったのが、現実の結婚に至らなかった一要因なのか等と思った次第です。

III. その他の発表

3.1 澤田キヌ

以上、①、②、③をベースに話を進めてきましたが、全く異なる話の組み立てを
発表しているのが、

④ 澤村修治著『宮澤賢治と幻の恋人 澤田キヌを追って』（河出書房新社、2010年）
です。

④の一部を再掲します。

(前略)これまで登場した「恋人」を、残らず列記してみると次のようになる。

時間順にならべ、当時の賢治の年齢と女性の職業、恋の展開をそれぞれ記す

- 1、高橋ミネ（第一の恋人）—賢治—七歳。看護婦。一方的片恋。
- 2、「Zweite Liebe」賢治一九～二〇歳。詳細不明。
- 3、大島ヤス子—賢治二五～二六歳。小学校教員。結婚相手として意識された？
- 4、澤田キヌ—賢治二七～二八歳。看護婦。第三者（弟）を同席した出会いを数回。
賢治より積極的にアプローチ。相手の家より拒絶。
- 5、高瀬露（第二の恋人）—賢治三〇～三四歳。小学校教員。はじめ友愛的相愛。
のちに女性から積極的にアプローチ。賢治より拒絶。
- 6、伊藤チエ（第三の恋人）賢治三一（～三五）歳。保母。第三者（兄）を同席した
出会いを二回。結婚相手として意識されたが賢治の病気により自然消滅。
- 7、木村呆子—賢治三四歳。師範学校、女学校教員。第三者（友人ら）を同席した
出会いを一～数回？成長したかつての顔なじみに、懐かしがって会っただけ？

1、5、6が賢治研究史によって共通知となった女性たちである。2、3、7は諸研究者からの
報告があったり、推測段階である女性たち。4は本書ではじめて明らかにされた女性である。
まずこのなかで、「ふたりだけで野に立つ」、逢い引きのようなことができた相手はいるだろうか。

（以下略）

以上で「ふたりだけで野に立つ」とは、本小論の6頁に掲げた「きみにならびて野に立てば」
の事であります。澤村氏は、これを自分が発見した澤田キヌに当てようとしています。

②と④は何れも2010年に発行されていますが、全く異なる推論を展開している事になります。
私は、この詩が大島ヤス子、澤田キヌのいずれを詠ったものか断定は避けたいと思いますが、
賢治が「春と修羅」の中で秘かに詠っているのは、大島ヤス子だと思っています。

3.2 宮沢賢治の食卓

この映画は、WOWOWで6～7月にかけて5回に亘って放映されたものです。

この中で、賢治の恋人として描かれているのが蕎麦屋『桜屋』の娘である桜小路ヤスです。
その出で立ちもフェルトの草履を履き、オペラバッグを持つなど、6頁に掲げた

「フェルトの草履美しくして」の詩に沿っています。

どうも宮沢家と大島家は疎遠になっているらしいと思われていますが、その理由として②は次のような説を紹介しています。

賢治がヤス子と別れた頃発表した童話『シグナルとシグナレス』の中でシグナル(賢治がモデル)とシグナレス(ヤス子がモデル)が最後は別れる事になるのですが、その原因に物わかりの悪い近親者が関係している様な話になっていて、それが大島家の誰かを指している事に大島家が大変立腹したというのです。

この童話は②に要約が有りますが、全文をウェブからも読めるようになっていて上記赤下線をクリックすれば可能です。

しかし、私が読んだ感じでは、これが長年に亘って両家を疎遠にするほどのものとは思えません。

もっと別な深い訳があるのではないかと思います。

そして何の明確な根拠がある訳ではありませんが、③にある次のエピソードが、それを暗示しているのではないかと考えてなりません。

ヤス子さんのご家族の一人からお聞きしたお話は意外であった。

これも時期とすれば、とし子さん(賢治の妹)の亡くなった恰度その前後にあたることになるが、(大正11年末から大正13年初めにかけて)、それまで健康で非常に明るかったヤス子さんは、急にすっかりふさぎ込み、無口になり、衰弱していった。

そしてある休暇に、(大正十二年の冬らしい。としさんの亡くなった翌年である。)

三日山の温泉に行って来たいと家族に云った。常は勤めから帰るとすぐ母に手伝ったり、弟妹の世話をしてすべてにやさしく勤勉であったその姉は、その頃は何かを思いつめているようになっていた。けれども姉の心を計りかねた直ぐの妹は、「姉さんの費沢！」と、やっかんでなじった。姉は、「かんがえごとをしたい。」と悲しげに云って家を出て行った。

その、頃の花巻の一般家庭では、季節でもないのに山の温泉に行くようなことは、まったくしなかった。

妹は、姉の心中は少しも知らなかったのである。

(いまになってみると、母だけは知っていたのかもしれないと思われるのだがと)

山の温泉から帰ったあと、弟妹たちの驚いたことに、あっという間に、まるで不似合な結婚を承諾して、アメリカへ行ってしまった。(以下略)

これを引用している澤口は②の中で、次の様に書き加えています。

妹たちはヤス子の気持ちを知らず、口をそろえてやっかみましたが、母だけはそっとヤス子の肩を抱いて、しずかに見送りました。

「気をつけてや」

きっと賢治と会うつもりなのだろうと、母親には分かっていました。

けれどもここで止めたりしたら、火に油を注ぐ結果になりかねません。

(たとえどんなに止めたって、この娘は行くんだからー)

上記③と②の内容はそれ自身大きな問題になるようなものではないと思いますが、この裏に賢治の名声を慮ると発表できないような闇が隠されている様な気がするのです。③の佐藤も、②の沢口も地元のひとですから、多分このエピソードの真実または地元でささやかれていた噂話を知っているのだらうと思いますが、それを暗示する精一杯の表現が以上だったのではないかと思えるのです。

IV. 終わりに

恋愛とか、詩の鑑賞などには疎い私でしたが、私論『仏説大東亜戦争』に関する思想の流れの観点から関心を深めていた宮沢賢治に関する

NHK 放送①『宮沢賢治 はるかなる愛』を見、さらにそのベースとなっている

② 沢口たまみ著『宮沢賢治 愛のうた』盛岡出版コミュニティ 2010年発行を熟読し、賢治の詩の一つの鑑賞法を理解する事が出来ました。

更に今年は、賢治の愛に関しては当たり年とも言える年になっていて、①の少し後に WOWOW で『宮沢賢治の食卓』が連続放送されたのでした。

それらを踏まえ、本稿を纏めるに至ったのですが、今年5月以降、本当に楽しいワークを重ねる事が出来、現在満ち足りた気分を味わっています。

以上